

世界のくらしと文化

— モンゴル④

遊牧社会の子どもと家族



写真1 結婚式、お揃いの帽子をかぶって立っている男女が新郎新婦(2004年、サブハン県にて)

風戸 真理

赤ちゃんが亡くなる

一九九七年六月七日、私が住みこみ調査をしていた遊牧民B家の五カ月の女の赤ちゃんが亡くなった。私がモンゴル国アルハンガイ県チョロト郡で最初の長期調査を始めて三週間目だった。一九九〇年代のモンゴルでは乳児死亡率が高かった。赤ちゃんを亡くしたBB(当時三三歳、名前は仮名)とその妻Sh(三三歳)の二人は、これまでに七人の赤ちゃんを亡くしてきたという。妊娠しても出産に至らなかったり、生まれた赤ちゃんが乳児期に死亡してしまうことが重なる状態を、モンゴル語で「フーフット・トクトドグイ」(赤ちゃんがとどまらない)という。赤ちゃんがとどまらない家はままあった。BB家もそのひとつで、彼らは実子の成長を期待しながらも、BBの実弟(二三歳)を養子にしていた。以下に、BB家の八人目の赤ちゃんが亡くなった日のフィールドノートから一部を抜粋して記述してみた。

「赤ちゃんは昨日から体調が悪そう、昼寝中にも少しの物音で目覚めては泣き、夜中もしばしば泣き出した。朝九時、BBがウマに乗り、四キロ離れた行政区の中心地に住む看護師を迎えに行った。女性看護師が来た時には、赤ちゃんの昨日までの赤いほっぺは色

あせ、白い顔にはおが茶色く荒れていた。看護師がグリコーゲンと生理食塩水を指示すると、B B 家に加えて一緒にキャンプしている近隣三世帯の H Z 家、N R 家、T R 家にはこれらの粉末とガラス瓶入りの溶液とがセットで常備されていた。看護師は最初にカラシナの粉を溶かした湯に赤ん坊の足をつけてマッサージするが、顔色がますます悪くなり、元気もなくなったので、生理食塩水を少量注射した。注射器は、看護師がもってきたガラスとステンレス製のもので、煮沸消毒して使った。看護師が心音をみると停止が確認されたようで、L h が幼い娘のように泣き出した。続いて、赤ん坊をだいていた B B の母と B B が泣き出した。看護師は即座にウォッカでしめらせた脱脂綿で赤ん坊の腹をマッサージし、さらにグリコーゲンを注射する。それでも心音が回復しないので、心臓マッサージをはじめた。しかし同時に、郡の病院に医者呼びにウマで出発していた H Z が、うしろから追いかけて呼び戻された。

この赤ちゃんは、行政区の唯一の医療専門家である看護師により、耳の病と診断されていた。母 L h はこれまで約一カ月間、朝夕二回、処方された錠剤を砕いて、ローソクの火にかざしたスプーンの上で水に溶き、指で温

歳までの子どもたちがこの赤ちゃんの耳に唾をたらし入れあっていた。このように、当時のモンゴルでは近代的な医療知識が広まっていなかったこともあり、赤ちゃんが多く亡くなった。

養子の習慣

モンゴルでは多産が奨励されていたこともあり、当時の遊牧地域では一〇人キョウダイはめずらしくなかった。一方、子宝に恵まれない B B のような家もあり、養子をもろうことも多かった。P n (五五歳、女性) にはなかなか子どもが生まれなかつたので、二〇歳の頃に女の子 P r を養子に迎えた。するとすぐに女の子が生まれ、さらに翌年も一人女の子が生まれた。しかし P n には息子がいないので、P n は養子 P r の長男 D W を養子にもらった。これで三女一男の家族となった。実子がいてもお養子をとることもあるのである。

擬制キョウダイ「タル」

P n 夫妻は、D W が一歳の時、D W には頼れる兄やおじがいなことから、擬制キョウダイの縁組みをおこなった。チョロート郡には「タル」というしくみがあり、これは血縁関係のない人どうしが儀礼を通して実の

度を確かめながらかき混ぜ、これをスポイトで両耳の中に差し込み、揉み込んでからその上に綿を詰めてきた。モンゴルでは、乳児の体調や機嫌の悪さが「耳が痛い」ことによるものだと考えられることが多い。対処法としては、耳の穴の中に水薬や唾液などを入れて耳たぶの上から指で押さえて揉み入れ、脱脂綿やこれがない時には綿入れの民族服の破れ目から引き出した綿で耳をふさぐ。赤ちゃんの耳当て用の五センチ角ほどの綿入れ布団もあり、ストープで温めてから両耳に当て、その上から帽子を被せることもある。L h の赤ちゃんは耳に薬を入れられると嫌って泣いたが、亡くなる数日前からは、スプーンをかざすローソクが赤ちゃんの近くで灯されるだけで泣き声をあげるようになっていた。私は L h に、耳に水を入れることの危険を説こうとしたが、「水ではない。薬だ。わが子は耳が痛いのだから薬を与える必要がある」と反論された。

B B 家の赤ちゃんが亡くなった翌日、四カ月になる H Z 家の赤ちゃんの耳に、一五歳の女の子が唾をたらし入れていた。これを見て私は、「日本では乳児はめつたに死なない。日本では乳児の耳に水を入れないからだ」と言つてやめるようお願いした。この時、彼女は唾をたらずのを片耳だけにしたが、数カ月後には七歳から一五

キョウダイのような関係になるという擬制兄弟姉妹である。タルになった人びとは一般に「タリン(タルの)・アハ(兄)・ドゥー(弟妹)」とよびならわされるが、実際には女性どうしでタル姉妹になるケースもある。

タル関係を結ぶ時には宴会を開いて、当事者どうしが会衆の前で、衣服およびチベット仏教において聖なる象徴とされる絹布を交換し、家畜などを贈りあう。この時から、タル関係を結んだ相手とその親族を、自分よりも年上であればタル兄、タル姉とよび、実の親やキョウダイと同様に敬意をもって対する。とくに人びとが強調するのは、タルとは口げんかも暴力沙汰のけんかもどちらも避けるべきだということである。またタルは、血縁者と同様に、結婚相手になりうる人びとのカテゴリーから除かれ、タルの親族も実の親戚と同じく七親等離れなければ結婚できない。タルを訪問する時には常に贈り物を持参する。とくに新年の祝いには、親族にするのと同じように必ず訪問して、上等な贈り物に絹布を添えて本人とその近親者一人ひとりに手渡し、またお返しに贈り物を受け取る。タルを結ぶ相手の年齢、性別に決まりはない。相手の選定に関して制約はないが、心から信頼できない、よい人だと思える相手としかタル関係を結んでほしくない。少しでも疑いなどを挟む余地がある場合には結

べない。人選についてはラマ（僧侶）に相談する人もいる。私がP nに出会った時、彼女の夫はすでに亡くなっていた。そして三女B r（約三〇歳）が離婚交渉中であった。離婚することは決まったものの、B rが夫の家から持ち帰る物について交渉が難航していた。婚入した時には家畜を持参したが、家畜の増加分や食べた分を相殺してどの個体をどれだけ持ち帰るかが決まらない。B rは身の回りの品だけをもって実家に戻ってきていて、交渉に行くたびにひどい言葉をあびせられたと言っていて、帰って大泣きしていた。モンゴルでは離婚は多いが、実際の離婚はかくも壮絶なものかと思った。この時、B rの弟D Wのタル兄が、B rの兄として、B rとD Wと一緒に元夫の家の向かい、強い交渉術を発揮して雌ウシ一頭と双子を連れた雌ヤギ一頭を取り返し、その場で家畜をとらえて追って家まで連れてきた。

モンゴル人にとっての親族の意味

以上に述べてきたように、モンゴルでは頼れる「親族」が必要なのである。とはいえ、必ずしも血のつながった親族でなくてもよい。実子に恵まなければならない養子ももらうことができる。キョウダイがいなければタル関係を結んでこれに代えることもできる。なによりも大切な

のは、血縁親族であっても擬制親族であっても、日頃から訪問しあい、贈り物を贈り合うといった日常的なつきあいを緊密にすることによって、関係を維持し、強固にすることであると考えられる。なお、チヨロト郡はモンゴルのなかでもとくに人口密度が高く、人びとのつきあいが濃密な地域だといえるだろう。

遊牧民の結婚

では遊牧民の結婚はどのようなものだろうか。草原にはお見合いや紹介といった制度はなく、本人どうしが自力で相手を見つけて結婚までこぎつける（写真！）。H Zの妻O e（二六歳）は、かつて四人から結婚を申し込まれたが、彼らをみな断ってH Zを選んだ。H Zとは同じキャンプにいたこともあり、酒を飲まないこと、性格がおだやかであることを見極めて決めた。適齢期の息子には父がゲルを買って与える。これを両親のゲルの隣に立て、夜だけ息子はここで眠る。この期間に男性は気に入っている女性の家を頻繁にたずねて仲良くなり、結婚を申し込む。女性は自宅にいて、たずねてくる男性たちから申し込みを受けたら、それを受け入れるか拒絶するかを決める。ただし男女ともに同世代の友人や親戚をたよって相手についての情報を得たり、伝えたりする「情

報戦」の面でもたゆまぬ努力をする。とくに男性は、意中の女性の両親が泊まりがけの遠出をする日などに彼女のキャンプをたずね、彼女のイトコなどを味方につけて手伝ってもらいながら、夜這いしたりする。結婚が決まったら、娘のために親はタンス、ベッド、鏡、写真立てを用意する。息子の多い家は息子の数だけゲルを用意しなければならないので親の負担が大きい。チヨロト郡には、学校に通っている時に知り合った相手と結婚している人が多かった。

遊牧民の子、学校に通う

チヨロト郡の中心地には八年制学校がある（写真2）。日本でいえば小学校と中学校が一緒になったような学校であり、授業料は社会主義期から現在に至るまで無償である。学校には社会主義期の一九八〇年代には約八〇〇人の生徒が通っていたが、一九九〇年代後半には転換期の混乱のために約三五〇人の規模となっていた。チヨロト郡の中心地は、役場、病院、郵便電話局、銀行、公民館、商店、住宅などの固定施設が集中している。「定住区」となっている。

当時のチヨロト郡では、子どもは六歳から八歳のあいだに入学することになっていた。とはいえ、移動生活

している遊牧民の子どもはどうやって通学するのだろうか。遊牧民は家畜によい草を食わせようとすれば、同じ場所に長期間とどまることはできないし、定住区のような人口が密集しているところではキャンプができない。学校に通う子どもは親元を離れて、定住区にある寮や親戚の家に寄宿してそこから通学する。発育の早い子どもは六歳で通学に挑戦するが、ホームシックで元気がなくなってしまうたり、寄宿先の大人になにも言わずに一人で何十キロも歩いて実家に帰ってしまったりするところがあり、学校生活が続かないことが多い。六歳の子どもが親元を離れて生活しながら、学校での勉強に励むのは容易なことではない。それでも翌年、翌々に再び挑戦するチャンスが用意されているし、また九歳以上になつてから入学する子もいる。一人では頼りない寄宿生活も、キョウダイと一緒にならのりきれることが多い。弟や妹が入学できる年齢になるのを待つて、一緒に入学することもある。

さらにいえば、遊牧民の子どもにとって、学校での集団生活は日本の子ども以上に慣れないものである。というのも、草原では人は散らばって住んでいる。モンゴルの家族は、夫婦とその未婚の子どもたちからなる核家族が世帯を構成し、ひとつのゲルに住んでいる。一世帯の



写真2 チョロート郡8年制学校の4年生の1学級（1998年、アルハンガイ県にて）

平均人数は約四人である。そして、チョロート郡ではふつう二〜四家族が集まって近くにゲルを立て、ひとつのキャンプを構成していた。子どもはキャンプ内で毎日を過ごす、同じキャンプにキョウダイ以外の年齢の近い子どもがいることは多くない。キョウダイ以外の子どもと遊んだ経験が少ない子どもは、学校に入った時にたくさんの子どものいることにとまどい、学校になじめないでやめてしまうこともある。

家族、親戚、学校の友人

それでも子どもたちは、親や教師に励まされながら学校と寄宿生活という新しい環境に適応し、友だちをみつけて学校生活を楽しくしていく。モンゴルでは、クラス編成は一年生の時に決まったら卒業まで変わらない。同級生の結束は固いものとなり、大人になっても同窓の絆は続く。遊牧生活のなかでは家族関係、親戚関係について大切なのが友人関係である。元同級生どうしが一緒にキャンプすることもある。また、草原での生活においては信頼しあえる者どうしの相互扶助が欠かせない。学校時代に育まれたかたい友情は、人びとがとても大切にしている友人関係の背景をなしているのである。（了）

（かざと まり／神戸山手大学非常勤講師）